

新田の碑

飯倉新田を歩く

市内には飯塚新田、内山新田、金原新田など「新田」と呼ばれる集落がいくつもあり、ます。現在の大字は、1591年に徳川家康によって着手された「天正検地」によって村域が定まった江戸時代の村が基になっています。市内にわずかに残る天正検地帳からほとんどの村むらがこの時期、

420年ほど前の1590年代に成立したと考えられます。その後低湿地の沼池などが新田に干拓され、人家ができて「新田集落」となりました。

飯倉新田は、1基の石碑によって成り立ちを知ることができます。現在飯倉新田集會場の立つ場所に数基の石仏や石碑がまつられています。その中に「開山 良無居士

役目を終えた後、この地で出家し僧侶となり修善院という寺を開いたのでしょう。1698年11月25日に亡くなり、三十三回忌供養のため1730年霜月（11月）に「施主新田中」、つまり飯倉新田の人たちが施主となってこの石碑を立てたのでした。

修善院は1795年の記録に記載はあるものの、「良無居士」以外の墓石が見当たらないので、無住の時代が続いたのでしょう。

寺跡とみられる集會場敷地内にある石宮などには、「飯倉村新田」「当邑新田中」「砂子」など刻まれ、集落が一体で活動したことがわかります。

明治3（1870）年飯倉新田の人たちは、「家族残らず、永世神葬祭つかまつりたく」と当時の県庁に「神葬祭願い」を提出し、同7年に亡くなった人を神葬祭で埋葬したそうです。

写真撮影のため集會場に行きましたが、「新田の碑」は残念ながら倒れていました。これは地域の歩みを伝える貴重な石碑なのです。

（元 市職員・依知川雅一）

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080



飯倉新田の成り立ちを記す新田の碑

刻まれた文字から、次のようなことが分かります。周辺の新田の干拓が進み、幕府から派遣された代官の小林半兵衛によって検地が行われ1693年3月に屋敷割、つまり民家の敷地が決められました。これをもって320年ほど前に飯倉新田集落が誕生したことになります。

半兵衛は、上州新町村（現在の群馬県桐生市）生まれで、代官としての